

平塚の石仏めぐり

16、中原・南原編



南原路傍の三面馬頭観音

中原・南原の石仏

大野地区は平塚市と合併前の旧大野町の範囲を指します。江戸時代の八幡村、四之宮村、新土村、中原上宿、中原下宿、南原村からなり、明治 22 年に二宿四村が合併して大野村となり、昭和 19 年に大野町、昭和 31 年に平塚市と合併しました。位置的には玉川（現渋田川）左岸の砂丘上に広がる畑作地帯が大部分です。

このマップでは中原上宿・下宿の二宿と南原村の石仏を紹介します。『新編相模國風土記稿』では二宿は中原村と称え一村とあり、戸数は 120 戸、鎮守は上宿にある山王社（現日枝神社）、寺院は浄土宗の大松寺、日蓮宗の慈眼寺（起立時は禅宗）・妙行寺の三寺が現存で、他に廃寺となった山王社の別當 得願寺（古義真言宗）、東嶽院（臨済宗）がありました。その他、村民持ちの地藏堂もあります。また南原村の戸数は 33 戸、鎮守は諏訪社、寺院は善徳寺の一寺のみです。

当地区の石造物は、中原は総数 105 基で主なものは地藏 14 基、道祖神 13 基、灯籠 9 基、題目塔 6 基、設置場所では日枝神社 36 基、大松寺 16 基、慈眼寺 14 基、妙行寺 10 基、裏宿地藏堂 6 基、旧道の路傍などにも多く祀られています。

南原では総数は 23 基で地藏 5 基、馬頭観音 4 基、観音・道標各 2 基です。設置場所は善徳寺 11 基、南原 2 丁目の辻に祀られた三面六臂の馬頭観音など 6 基、諏訪神社 4 基などです。

石仏豆知識 12. 徳本名号塔と大会念仏

お念仏で称えられる「南無阿弥陀仏」の言葉を六字名号、または単に名号といいます。六字名号を称えれば極楽浄土に往生できるという思想を受け、江戸時代以降、各地に「南無阿弥陀仏」の文字を刻んだ「名号塔」が数多く建立されるようになりました。

「徳本名号塔」は、江戸末期の文化・文政(1804～1830)のころ、念仏を称えて全国を行脚し人々を救ったとされる徳本上人の独特の書体で刻まれた名号塔です。市内には 27 基の徳本名号塔が確認されており、県内の市町村の中では最も基数が多く、本市に特徴的な石仏といえます。

徳本上人は宝暦 8 年(1758)に紀州日高に生まれ、41 歳まで紀州で苦行の後、摂津に出て修行と衆生の化益に励みます。やがて名声を得て徳川家や御三家の後ろ盾もあり、わかりやすい説法と、鉦や木魚を激しく打ち鳴らす独特の念仏が人気を博し、信仰は武家だけでなく庶民にも浸透しました。

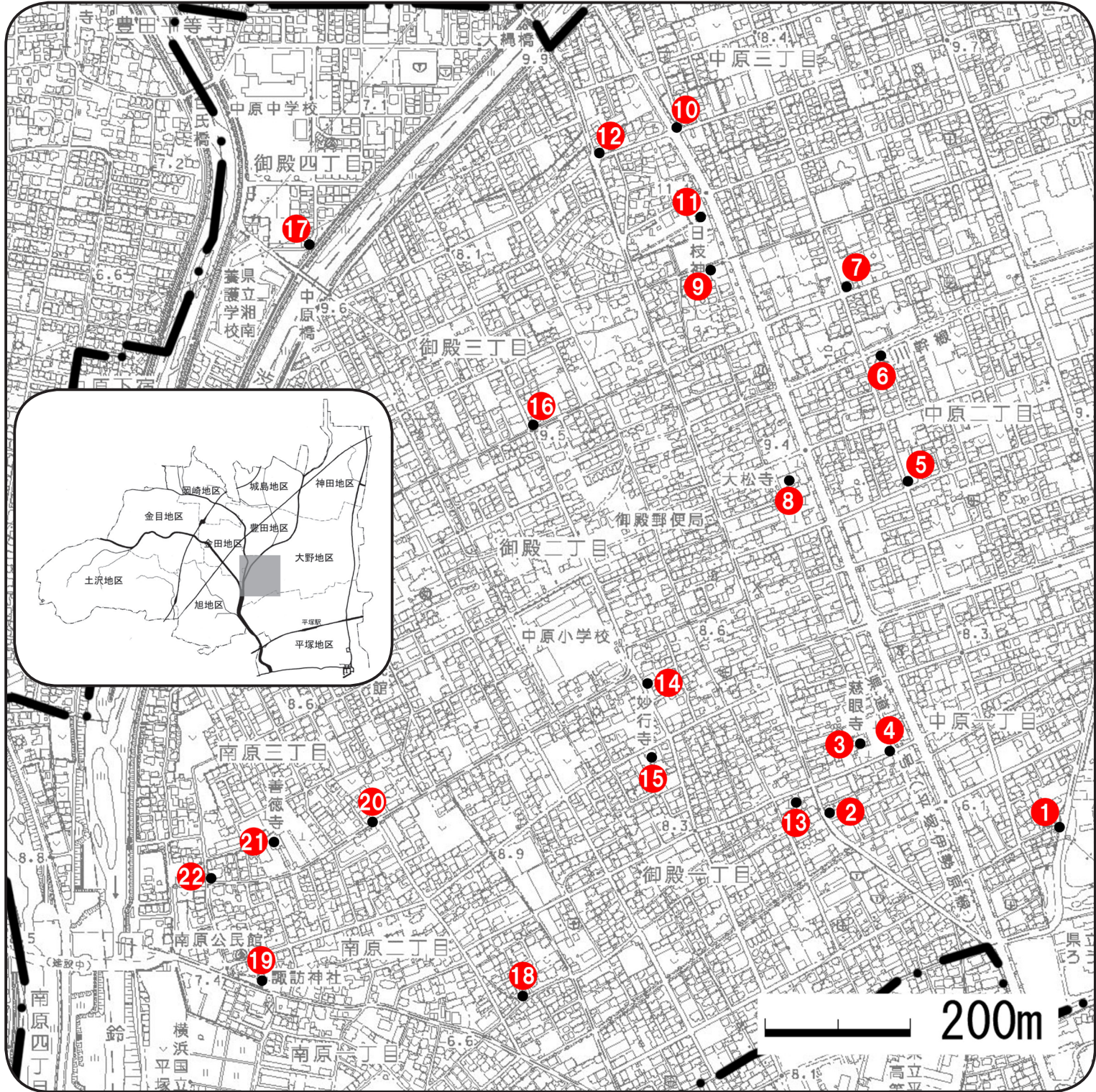
徳本上人は平塚に少なくとも 3 回来訪し、中原の大松寺と幸町の海宝寺に数日間滞在し、徳本名号札が何千枚も授与されたとの記録があります。

徳本上人の弟子は千人ともいわれ、市内の徳延出身で直弟子の称善和尚が周辺に念仏講を組成しました。その念仏講は旧中郡全域にわたる規模の大きさから東組、北組、仲組、西組という四つの組織に分けられ、「大会念仏」と名付けられました。

市域に関わる大会念仏は、中原の大松寺を中心に東組、纏の宗源寺を中心に大磯から二宮、国府津にかけての仲組、南金目の光明寺から秦野まで回り、土屋の大乗院をしまい念仏とする西組の各講中がありました。上人の死後も、毎年 1 月中旬から春にかけ、徳本上人ゆかりの念仏講が 100 年以上続きました。

中原・南原の石仏所在地と主な石仏

番号	名 称	住 所	主 な 石 仏
1	中原下宿稻荷前	中原 1-1	狛犬
2	中原下宿路傍	中原 1-20-17	地藏
3	慈眼寺	中原 1-23-16	題目塔、奉納塔、地藏、地藏・万霊塔、浄行菩薩他
4	中原下宿路傍	中原 1-23-16	地藏、道祖神、観音
5	中原中宿路傍	中原 2-3-25	道祖神
6	中原中宿路傍	中原 2-5-16	道祖神、供養塔
7	中原上宿路傍	中原 2-27-24	道祖神
8	大松寺	中原 2-20-18	記念碑・震災供養塔、庚申塔、地藏・念仏供養塔、地藏、宝篋印塔、徳本名号塔他
9	中原上宿路傍	中原 2-25-23	道祖神
10	中原上宿路傍	中原 3-17-59	道祖神
11	日枝神社	中原 3-20-16	庚申塔、薬師如来、道祖神、不動明王・庚申塔・道標他



番号	名 称	住 所	主 な 石 仏
12	中原上宿路傍	中原 3-24-11	馬頭観音
13	東嶽院跡墓地	御殿 1-3-24 西	地藏・六地藏、薬師如来他
14	中原御殿路傍	御殿 1-7-13	道祖神
15	妙行寺	御殿 1-23-21	題目塔多数、水子地藏、浄行菩薩他
16	中原裏宿地藏堂	御殿 3-12-7	地藏、道祖神
17	中原新川端路傍	御殿 4-12-4 南	道祖神
18	南原東町路傍	南原 2-6-7	馬頭観音、地藏・道標、観音・巡拝塔
19	諏訪神社	南原 2-16-10	石祠、庚申塔
20	南原横宿路傍	南原 3-1-10	道祖神、地藏
21	善徳寺	南原 3-2-7	徳本名号塔、地藏、観音、六地藏、不動明王他
22	南原上町路傍	南原 3-2-18	道祖神・道標

※ 当ガイドマップに記載されている石仏の基数は令和 3 年集計時点のものです。

石仏めぐりを行う場合の心掛け

石仏は、古来より多くの人々がさまざまな願いをこめて手を合わせ祈ってきたものです。今でも信仰の対象とされているものも数多くありますので、見学に当たっては、敬いの心を持って接しましょう。また、お寺や神社など石仏の管理者がいらっしゃる場合は、石仏を見学する旨一声かけてから見学しましょう。

平塚の石仏めぐり（16. 中原・南原編）

発行日：令和 4 年 11 月
編 集：石仏を調べる会
発 行：平塚市博物館
住 所：神奈川県平塚市浅間町 12-41
電 話：0463-33-5111

慈眼寺の石仏 (地図番号③)

慈雲山慈眼寺は日蓮宗の寺院です。僧日恵が日蓮宗に帰依して中原の地に慶長2年(1597)堂宇を建立し、師の日新をもって開山したものです。

題目塔・読誦塔 参道入口の寺号塔の後ろに、元文2年(1737)造立の総高209cmの立派な題目塔があります。

日蓮宗の基幹となる「妙法蓮華經(法華經)に帰依する」を意味する「南無妙法蓮華經」を髭文字で正面に刻し、右面に「慈雲山慈眼寺」、左面に「法華經千回読誦」と刻んでいます。また台左面には「當寺十世 幽玄院日義造立之」とあります。

水子地蔵 山門をくぐって直ぐ左に昭和54年(1979)に建てられた全高326cmの大きな水子地蔵があります。

水子供養は1970年代に始まったとされています。子安地蔵は以前からありますが安産、子育てを祈願したものです。水子地蔵は人工中絶も増えた社会変化の中で、秩父の寺院の提唱がきっかけとされています。

この地蔵の足元左に別の一回り小さな水子地蔵もあります。



題目塔・読誦塔
(元文2年)



水子地蔵 (昭和54年)

大松寺の石仏 (1) (地図番号⑧)

大松寺は浄土宗(芝増上寺末)の寺院で本尊は阿弥陀如来です。徳本上人相模布教の一拠点となった寺で、大会念仏東組講中の中心でした。また境内には廃寺の得願寺から明治5年(1872)に移された観音堂があり、相模新西国三十三番札所のうち第十九番札所となっています。

境内にはここで紹介しきれない数多くの石仏があります。
地蔵 境内に入ると右手に六地蔵と並んで4基の地蔵が建っています。

一番左の地蔵は盆念仏供養のため正徳4年(1714)造立されたものです。二番目の地蔵は念仏講中の人々が寛文12年(1672)に造立したもので、台石に地蔵は「地獄にあって諸罪人を救う」という主旨の経文が彫られており、中原では最も古い石仏です。三番目の地蔵は念仏をして廻る行者のため、村の人々が同じく寛文12年に造立したものです。



地蔵 (左より正徳4年、寛文12年、寛文12年、享保5年)

大松寺の石仏 (2) (地図番号⑧)

右端の地蔵は享保5年(1720)の造立で、石の舟に乗った形をしていることから「舟乗り地蔵」と呼ばれています。

舟に乗った地蔵は享保4年(1719)から数年の間に作られたものが多く、この時期関東から中部地方東部にかけて大流行した岩船地蔵信仰に由来する地蔵です。市内では「岩船地蔵」銘のある地蔵は、いずれも享保5年造立で4基が確認されていますが、舟に乗っていない形のものもあります。

徳本名号塔 本堂右脇に、「南無阿弥陀仏」と彫られた3基の徳本名号塔が建っています。

左より年代不詳、文化13年(1816)、文政7年(1824)の造立です。特に中央の高さ約3mの塔は、四面に徳本上人独特の書体で六字名号が、また台石には大会念仏の組成者「称善」の名前や近隣の町村は勿論のこと、西は小田原、北は厚木近くに至る89ヶ村の講中名がびっしりと彫られています。



徳本名号塔 (左より年代不詳、文化13年、文政7年)

日枝神社の石仏 (地図番号⑪)

以前は「山王社」と呼ばれ中原の鎮守です。中原御殿造営時、鬼門鎮護のため現在の中原小学校敷地から移されました。

庚申塔 鳥居をくぐった右側に元禄11年(1698)銘の高さ186cmの堂々とした笠付型庚申塔が建っています。

上部左右に日輪月輪を配し、中央に六臂の青面金剛立像が、手には弓矢、合掌、三叉鉾、宝輪を左右に持ち、下部には不言不聞不見の三猿が位置します。銘文には中原村得願寺(現廃寺)と8名の記名があります。延宝から天明に多く見られる形式です。

庚申塔・不動明王・道標 社殿左奥に、を載せた高さ150cmの塔があります。

正面に「庚申供養塔」と銘があり庚申塔であること、左右面には行先表示があり道標とわかります。上部の像は胸部から上が欠損しておりますが右手に宝刀の柄、左手は縄索を持っています。衣の着用が偏袒右肩のため不動明王と思われます。左面に「ステーション道」とあり平塚駅開業明治20年(1887)以降の造立と思われる。



庚申塔 (元禄11年)



庚申塔・不動明王・道標
(年代不詳)

東嶽院跡墓地の六地蔵 (地図番号⑬)

東嶽院は医王山と号す臨済宗の寺院で、明治時代に本寺の豊田本郷清雲寺に吸収され、廃寺となりました。

高さ60cmの角柱台石正面に「六地蔵」と大きく書かれ、この上に錫杖と宝珠を持つ地蔵が坐しています。一尊ですが、六地蔵であることが分ります。明和4年(1767)に建立され文政7年(1824)に再建されました。施主には念仏講中として、何々の室とか母、妹などと彫られています。



地蔵・六地蔵
文政7年)

中原裏宿地蔵堂の地蔵 (地図番号⑬)

道の辻のお堂の中に、手に錫杖と宝珠を持つ長寿や健康を願う延命地蔵坐像が安置されています。天保10年(1839)に再建立されました。また造立年代は不明ですが、3基の地蔵も安置されています。

裏宿の町内では、十数軒の家々が順番に宿を務め、地蔵尊の縁日である8月24日前後に、この前で百万遍念仏が行われていました。

堂横には道祖神も祀られています。



地蔵 (天保10年)

南原東町路傍の石仏群 (地図番号⑬)

南原バス停から東に入った路地の三叉路辻に6基の石仏が並んでいます。馬頭観音4基、巡拝塔1基、道標1基です。

馬頭観音 左から二番目の像は馬頭観音で、高さ83cmの舟形光背を持った三面六臂です。忿怒相と相まって一際異彩を放ちます。造立年は不明です。

観音・巡拝塔 中央の高い塔は、高さ125cmの自然石に「西国秩父坂東百番」とあり巡拝塔です。また中央に大きく線刻で千手観音が刻まれています。観音は42手のうちの2本を頭上に挙げ組み合わせる清水型で、16番札所の京都・清水寺本尊(立像)を模したものです。

地蔵・道標 左から四番目の塔は、高さ79cmの笠付型で中央上部に地蔵坐像が陽刻されています。正面には「右 か奈い十日市場 左 ひら津可八はた 道」とあります。この場所は平塚新宿から十日市場(現秦野市曾屋)への旧道沿いにあたります。造立は寛政12年(1800)で庚申年となります。



左より馬頭(天保13年)、馬頭(年代不詳)、観音・巡拝塔(明治15年)地蔵・道標(寛政12年)、馬頭(年代不詳)、馬頭(大正14年)

南原横宿路傍の舟乗地蔵 (地図番号⑳)

善徳寺から東に約100m先の丁字路路傍に小屋掛けされた地蔵が石祠と並び佇んでいます。

高さ95cmの舟に乗った地蔵坐像です。地蔵の素材は褐色の凝灰岩ですが、舟は鼠色の安山岩様で別々に作られたようです。

一見岩船地蔵かと見えますが、地元では、金目川の水害で亡くなった人の供養とか、善徳寺裏の池から出現した地蔵を舟に乗せて祀ったとかいろいろな伝承があるようです。



舟乗地蔵 (年代不詳)

善徳寺の石仏 (地図番号㉑)

善徳寺は浄土宗(芝増上寺末)の寺院で本尊は阿弥陀如来です。

徳本名号塔 総高305cmは市内三番目の大きさで、安全のため鉄柵で囲ってあります。ご住職が仲組の初念仏を行う纏の宗源寺を兼務されており、同じ仲組に属したと考えられます。台石の正面に当寺23世の「練譽上人」、右側に「村講中」、左側に「中組講中」と併記してあります。『徳本上人因縁往生伝』の中に、南原村の伊兵衛が徳本を慕いつつ往生した様子が収められており、名号塔建立の契機となったと思われます。

不動明王 製作は明治31年(1898)ですが、材質が凝灰岩で像容は剥離が進んでいます。世話人2人は笹尾氏です。

『大野誌』によれば、開山の善徳徹嶽は武田信玄の家臣で、河内の大館氏、南原の笹尾氏の祖先とあります。協力者6名の中にも笹尾姓が4名刻まれ、一族が関東三大不動の成田不動尊を勧請し、寺の周辺の上町で祀り、8月28日の縁日には寺で不動講が行われていました。



徳本名号塔 (嘉永元年)



不動明王 (明治31年)

南原上町路傍の道標を兼ねた道祖神 (地図番号㉒)

善徳寺西の丁字路に、「道祖神 右馬入道 左金目道」と彫られた大きな自然石の碑があります。以前は上町、横宿、鍛冶町、東町の4つが、それぞれ小集落をなしていて、この碑は東町と上町が祀る道祖神です。

ここは秦野の曾屋に通じる十日市場道の通りで道標を兼ねています。『大野誌』には「小字久保、旧中原道と旧曾屋道(馬入道)との分岐点に一基あり」と記されています。



道祖神・道標 (年代不詳)